

「発達障害の子が急激に増えている」「子どもが発達障害なのは親の育て方が悪いからだ」「テレビやゲームに長時間接すると発達障害になりやすい」

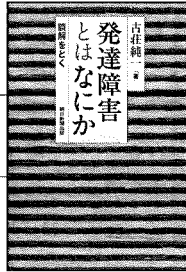
発達障害が理解されつつある一方で、誤った見解が世間に広がっているようにも思う。親や教師でさえ、障害への表層的な理解によって、子どもたちの心を、人格を傷つけて

いる場面がありはしないかと懸念される。

本書では、小児科・小児精神科の専門医であり、青山学院大学教育人間科学部教授でもある著者が、豊富な症例をあげて、

発達障害とは何かを説いている。著者は特に広汎性発達障害、

A・D・H・D、学習障害の三つのグループについて、基本概念や病態に関する中核症状（米医学界が示す診断基準による）や近年の研究成果に基づき、発達障害はスペクトラム（連続体）であるという考えに立って、詳細に支援の方法を述べている。



発達障害とはなにか
誤解をとく

古荘純一 著
1620円 朝日選書
☎03-5541-8757

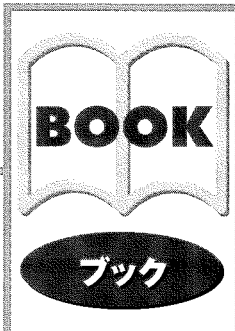
広汎性発達障害

書におけるこだわりや感覚異常に関する解説、例示されたA・D・H・D診断評価スケール、学習障害の人の学習上、日常生活上の困難さについての論述等を読むと、身近にいる子どもたち一人ひとりの姿を思いか

さねて考えずにはいられない。

本書では前述の三つのグループの他にも、発達障害周辺の障害や疾患として、知的障害、発達性協調運動障害、吃音、チック症等について詳しくしている。

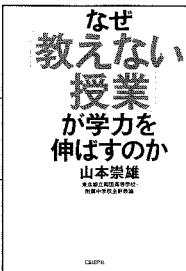
「同じ診断名だからといって、同じように対応することには無理がある」という著者の言葉が重く響く。日々子どもたちと直面する者として、発達障害についての理解を整理し、深めるうえで、貴重な一冊である。
(元川崎市立中学校校長・青木幸夫)



本書は中学校の英語教諭である筆者が、長年生徒に授業をしてきた経験を活かして著したものである。

筆者が目指している「教えない授業」とは、「アクティブ・ラーニング」の手法で「子どもたちの問題解決能力を育てていく教育」である。生徒自身が「学び」を理解して、教師はファシリテーターとしての役割で授業を進めていくこととしている。そして、この教育は「学校教育だけでなく、社会で活躍する人材の育成や家庭教育にも応用できる」と主張している。

第1章では、「教えない授業」の概観を、過去に行なった授業や生徒の声、さらに、英語指導に関する調査グラフ等を挙げて説明している。第2章では、「英語で実践する「教えない授業」について、効果的な実践指導のノウハウを具体的に述べている。例えば、「問い」から始まる授業、辞書を使うことが



『なぜ「教えない授業」が学力を伸ばすのか』

山本崇雄 著
1620円 日経BP社
☎03-5696-6000

自立への第一歩、文法の学びを知る、仲間と協働して学ぶ、入試問題もジグソー法で挑戦、学び方の手段を増やしていく、等であり参考にしたい内容が満載されている。また、第4章の「教えない授業」は大学入試に通用するか」では、文部科学省の方向性と入試の変化を挙げて「何を学び、将来それを使ってどのように社会に貢献したいか」というビジョンを持つ」ことが必要だとし、さらに、入試に対する親の意識改革が必要であることも述べている。第5章では「教えない授業」で学校の授業や教師が変わった例を、そして最終章では、家庭での「教えない教育」についての方法論が述べられており、「姿勢の在り方」に対する筆者の姿勢が認識できる。

「大学入試での合格は人生のゴールではない、失敗しても、また立ち上がる力を持つことの方が大切です。」、「僕の守りたいものは、子どもたちの笑顔です。」ということばに励まされる読者は多いだろう。
(愛知教育大学教授・高橋美由紀)